

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール沿岸）」成果報告書

学校名：岩手県立宮古工業高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 津波防災啓発活動について

復興庁より平成31年2月17日「新しい東北」復興・創生顕彰を受賞し、地域の防災意識の高揚に勤めたい。また、平成27年「第17回水大賞」の名誉総裁秋篠宮殿下より「災害の記憶の風化や、津波防災危機意識の啓発を伝えることが重要である。」とのお言葉をいただき、継続して活動を行ってきた。

本年度は、疑似津波実演会を、総計14回実施した。その内訳は小学校が7回、イベント関係が7回であり、昨年度よりわずかに回復した。一方、中学校と高校等の実演会は年々減少している。

表－1 実演回数

年度	小学校	中学校	高校	大学	イベント				合計	震災前・後
					市内	県内	県外	他		
17年						1			1	60
18年	1					4	2		7	
19年	2				3	4	2		11	
20年	3	1			3	1		2	10	
21年	5	1			4	2		2	14	
22年	8	1			4	2		2	17	
23年			3					1	4	132
24年	5		1	4	2		1	3	16	
25年	5	2	3		3	2	1	1	17	
26年	5		1		5	1	5	1	18	
27年	5		3	2	5			2	17	
28年	6		4	3	1	1	1	1	17	
29年	7		1	1	4	1		2	16	
30年	5		1		6			1	13	
1年	7				5			2	14	
合計	64	5	17	10	45	19	12	20	192	
	96				96				192	

2 南海トラフ模型の製作について

平成28年から南海トラフ模型を継続して製作している。250,000分の1の模型は、宮崎県日向灘沖から千葉県と茨城県の県境の約1,000km間で、南海トラフと相模トラフが連なっている。長さ4m15cm×幅1m80cm×高さ18cmの模型である。本年は、中部地方の地上1000mから作業を開始し、200mごとにベニヤ板を切断し組み合わせていった。山が高くなるにつれ、連なったところが分岐し、作業が困難になるところも多くなり、時間を要しながら作業を進めている。九州地区と離島を除けば80%前後のできあがりになった。

II 取組の概要

1 津波防災啓発活動について

(1) PTA・地域関係者対象の実演会



図－1 津軽石小学校のPTA・地域関係者

今年度は、2日間の日程で、初日に津軽石小学校の児童対象の実演会、翌日は同校PTAをはじめ、地域関係者が参加する実演会を企画した。土曜日開催のため参加人数は少なかったが、熱心に観ていただいた。実演内容は、プレゼンテーション・パネル紹介・疑似津波実演の3部構成で行った。

(2) 8年ぶりの重茂小学校実演会



図－2 8年ぶりに実演が行われた重茂小学校

重茂小学校は宮古市の東部、重茂半島の東海岸中央に位置する。重茂小学校では、平成23年3月3日（昭和三陸津波記念日）に3回目の実演会を行っているが、わずか一週間後、東日本大震災で海岸部は全て津波にのまれ、集落のほとんどが壊滅的な被害を受けた。また、近隣の小学校2校は津波の影響を受け廃校となり、重茂小学校に統合されている。令和元年11月22日、実に8年ぶりに実演会を開催することができた。通算4回目の実演会は、全児童が参加して行われ、低学年と高学年に分け、どの児童も真剣に観てくれた。

(3) 全国防災ジュニアリーダー育成合宿東北参加



図-3 全国の災害被害県の参加中高校生

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿東北」は8月17～19日に行われた。本校からは2名が参加した。この合宿は、全国で自然災害により被害を受けた中・高校生を対象に防災のリーダーの養成が目的である。主な日程は、1日目が被災地の高校生の案内による津波被害状況の学習、2日目が図上避難についてディスカッションや防災のグループ内の対話、沢活動などを行った。3日目はジオパーク見学と被災体験・復興についての講話であった。

参加者のからは、「ワークショップが多く、分りやすかった。」「対話や伝達の難しさを知った。」「全体的に有意義だった。」などの感想があった。本校生徒は、「未来に語り継がなければならない。」と決意を新たにすることができた。



図-4 荒砥沢地すべりを背景に記念写真

2 南海トラフ津波模型の製作について

昨年からの引き継ぐ作業で、中部地方の山岳地帯、1,000mから作業を開始した。当初、生徒は作業内容を理解することが難しく、模型製作に慣れるまで時間を要したが、1段目、2段目と時間をかけながら作業を行うことで、徐々に作業内容や過程を理解した。中部地方は現在2,800mまで進んでいる。紀伊半島と四国地方は、頂上部と麓に若干の未施工箇所がある。現在は、中国地方の内陸

部400～600mの作業を進めている。高山は少ないが数が多いため、時間を要し困難な作業となっている。そのため、誤断したところが多数あり、修正をしながら作業を進めている。

また、今年で3回目の来校となった「ふっこう支援掛川」は、8月17日に津波実演を見学し、その後、模型製作の作業を体験した。指導の担当は生徒である。陸上と海面の境をつくるために印刷した緑紙をカッティングした。入り込んだ湾が多いため、その地形に合わせて紙を切り抜くことに相当苦勞したようだ。切り抜いた紙は、四国の海抜0～200m地帯の一部に使用した。

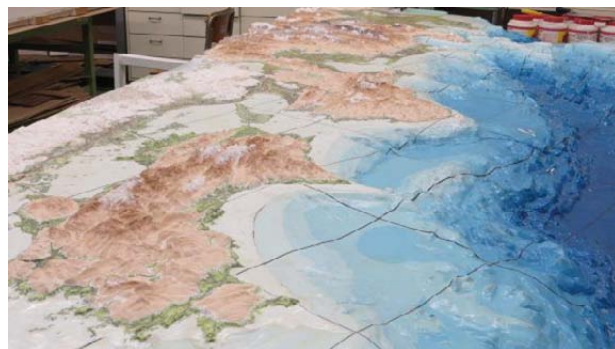


図-5 製作中の南海トラフ模型

III 取組の成果と課題

1 津波防災啓発活動について

津波防災啓発のための実演会は年間14回開催できた。昨年より1件増である。小学校7回、イベント関係7回である。小学校では、重茂小学校で8年ぶりに実演会を開催することができた。小学校での7校開催は、震災前の8校に続くものである。しかし、宮古地区の児童減少に伴い、来年度は小学校の統合が進むことになる。これにより実演会の開催が減少する可能性が高い。お年寄りから子供まで、避難の重要性や安全な避難行動を学ぶためにも実演会の機会を多くし、学びの場と活用できる手段について検討しなければならない。

2 南海トラフ模型の製作について

超大型で縮尺比の大きい模型であり、作業が細かく大変である。特に、中国地方の内陸部や北陸地方の福井・岐阜の西部付近は、低い山並みが多く、作業がはかどらないところが多い。要領よく急がずに正確に作業を進めることにより安全な作業も確保できる。来年の8月で作業開始から4年目となる。完成まで、多種多様な作業があるが、全国に披露できるような完成度の高い仕上がりを目指して作業を進めていきたい。